# 奇說排悶録

三

吉田屋

へ13
3143
3

吉田屋

春

# 奇説排門録巻之三

貞烈之部

目録

黄善聰
倪氏
嚴貞烈
張貞女
許烈婦
二烈
張烈婦

特 へ 13 3143 3

鄭氏
嶽賈妻妾
林氏
金三妻
汪來姐
秀水賊犯女
劉貽春
高三
許氏鶴
鷄

合十七種



吉田屋

奇説排門録巻之三

貞烈之部

黄善聰

黄氏の女善聰と云へる女あり。金陵地名の淮清橋の住けり。年十二の女母を失ひぬ。姉ハ已の人の嫁しぬ。父香を販く業とせり。善聰が如しく依り頼む所無き孤憐をく。男子の装へせ携へて盧鳳地名の間を遊ぐ。数年ありて父死しぬ。善聰姓名を張勝と更て父の業を為て。茲の李英と云者あり。此も香を販る人なり。金陵に来りしが。伴侶と為て寝食をも共にせり。さて共年を喻ひて女なるを知らざりき。後の李英と階の金陵の返りて。其妹の家を訪



六樹園翁　譯

けるが。姉も初めハ妹なるゝ成識らぬ。其故を聞く怒て詈る曰。男女同伴する道理やある。汝来て辱を我が及ぶとや。と云く拒納まず。善聰死を以て誓ひ云く事をせぬ。と云。其時鄰なる嫗を呼て云く成察せ〜むるが果〜く處子がそなる。姉始く妹が辛苦せ〜るを成悟て哭て相抱く哭て。さて善聰裝を改めて女の服を着けて。翌日李英入来て同く往ん夏を約せんとする時。女なるら成聞く大に驚き怪ぬ。李英母に告て善聰と婚を為んと求むまでも。善聰従へず〜く曰。若李英が嫁〜ば。是やぐ密に〜〜ひるのまさらんと。人の疑を生ぜ〜。と云鄰里の者さまぐ勸るまた堅くいなまく従ふ夏あ〜。官府あまを聞く其聘禮を助け玉ひ命ぜらまく夫婦とす〜玉ひ〜て。此夏明史の列女傳にも載ありく著きるのみとそ。

## 倪氏

歸安地名の倪氏ハ陳敏八と云者なる。聘を受くいまだ婚せざ〜時陳軍に従ひ行く返て来ず。人誤を傳て陳死せりと云て。倪氏失く嫁せず。五十年を過〜て陳帰て来て始く婚姻をそ。倪女時に年六十一なる。夫の年六十八なる。夫婦とも霜雪頭に盈て。時い人此を白頭花燭と號てりとそ。

## 嚴貞烈

嚴氏ハ宿遷地名の人なる。父某孝四鄰郷名に住て農を成て業とす。

此處河邊なれば時々水の災あり。家貧くして煙を立て兼ねぬ。嚴氏いやゝ笄せざるもこれも（女子十五已前は笄せざる）父嚴氏を李文波と云者の家の遺ゝ李文波は金墉市の（名）の市の賈人の子なり。幼き時父母の遺るを。兄嫂が家に養はれて居る。嚴氏なれども事る夫男姑の如く。進退皆禮を以て仕へる。食物のあらざるを。織縫の業にて為ざるなり。丙子の年文波病て臥居る所に兄嫂嚴氏に屬して。文波を看病せよと云へば。嚴氏唯々と答へ藥餌を煎じ起居を扶らるゝ。只一人にて勤む。夕べには衣襟を整へ帶をゆるめ鮮夜あり。文波病重くして遂に死に至る。嚴氏血の泪を出して泣て食せざるを。なぐさめ誓て穴を同くして死せんと云へば。父及兄嫂勸慰めて母の



家に還らしむ。嚴氏曰兄は李氏の婦なり何ぞ父母の家に帰らんと。堅く死なんとす心弱決せず。兄嫂日く来て衛り居る。嚴氏製を脱所の衿。枕。帨。履。簪。珥等の物を取出て南北の隣家の子女に與へて日此らの物は吾が用ひ汝に貽る。我は他日新き衣襟せんと云ふ。扨飲食なども平常の如くなれば。兼て死なんと云心少し弛む。と皆喜ぶ。其後半時ばかり傍を離れ居て間に。嚴氏已に繩を梁に投げて縊死せり。其時観者相聚る夏堵垣の如く人の如くに。此を哀まざる者なし。其戸を塞ぐに李文波と穴を同くして葬れり。

張貞女

張貞女が父の名は張燿といつて。嘉定曹巷（嘉定は地の名も曹巷は小名）の人なり。貞女汪客が子を嫁せる。客は嘉興地名の人なり。僑を安亭地名に住す。其妻汪嫗（汪氏の老婆を云ふ）好者なる人と私事のごとし。汪客老て酒を飲む。客が子の婦を娶る時惡少皆室の内に在て。果殽を並べて歓宴をなす。嫗婦を挈て出て惡少を拜せしむる。貞女拜せず。惡少を過して姑が為を所を見て。夫に語て曰某々と云者は何人ぞや。夫が曰是吾父の好友なり。通家の往来久き人なり。貞女曰。好友とも何事をなるぞ。汝長大なれ。汝が母斯の如きを恥ずるなるべしやと云へり。一日嫗惡少と同く浴をとて。婦を呼て湯を持来れと云へ。貞女湯を提て至れば男浴室に居る。驚走て遂に日の家に帰る。哭して数日なる。人其故を知者なし。其母強て問へば。漸あて宜を告げ。斯て居る事久しくして。嫗が方より偽て。好言のて貞女に侘て貞女再至る。嫗悪言を以て凌辱む。貞女時に泣て其夫に語て。諸惡少を謝して交を止め玉へと云て。又問を問て従容に客を勧て。婦も又ヨワて酒を飲玉へと云へ。共客父子愚にして終に省ず。又て婦が云へとて嫗怒て婦を召て至る。此家に来る惡少の中胡巖と云者最策黠なり。群黨皆あり。親と崇めて。下て其指使に従ふ。一日胡巖惡少等に向て曰。汪嫗老へり。此に来る。唯財を利として且ヨ

く酒を飲むなり。新娘子城の美なり。吾己の其姑と共に寝ぬ今其婦の室に寝んとす。他処に上る事能へじと云て入て媼に語りて云。新婦人を厭ひて人の意に叶はず若胡郎と共に寝たり。一家に在りて吾等快意楽を行はんと且之を碍言者はわらむと云へむ。媼承引て然るべしと云ふ。其子の縣へ出る後に。媼貞女に命じて悅を織らせて。已が私せる奴に遣らんとす貞女吾豈奴が為に織らんやと云媼益々怒る。胡巖等四人樓に登りて縱に酒を飲て貞女を呼て登て同く飲やうと云ふ。貞女機室に居て答へず胡巖後に来て金梭を奪ふ貞女詈つて且泣くに。胡巖梭を還して與へず貞女梭を折て地に擲つ。媼已が梭を以て與へるに又梭を



折て機を罷て出ぬ頃あり媼浴をるに。胡巖も来て共に浴を浴して畢て媼が曰今日新婦が室に宿せんと云胡巖入て貞女を犯えんとするに貞女大に呼て人を殺すと人を殺すと云て杵を以て胡巖を擊つ胡巖怒て走て出ぬ貞女房に入て自仆て地に臥て泣く其声一夜絶ず明日に成て息絶るが暮に至りて漸く蘇ぬ。さて跛泣くばかり死せんとす巖と媼と事の泄んを恐て貞女を床足に繫ぎて守りて居り。明日諸惡少を召て酣飲して。二鼓の比貞女を縛めて鐵椎を以て擊つ貞女編笞堪ずして何ぞ刃を以て速に殺さで徒に苦ぶ一人前んで其頭を刺して一人其脇を刺して又其陰を掠つ遂に殺して畢て共に尸を焚て之を焚んと欲するに尸重くして挙べからず

胡巖汪姬と謀り新娘子張貞女を挑む

其時火を縱て其室を焚く。鄰里の者火を救ふとて入来て貞女子ゞ戸を蹴て。驚て死人ありと呼ぶ。諸悪少皆逃行る。中の一人私に曰我鐵錐を以て婦を刺る。數四せしゞ死せざれども死人の死し難きの斯の如しと云ふ。貞女死せる時年十九にして。明の嘉靖二十三年五月十六日なり。官小女奴及諸悪少を召て鞫さるる時。女奴悪少を指さして曰是某と云者吾姊を縛り。此某雅を以て撃てり。某刃を以て刺せりと云へり。嫗悪少を罵て曰。吾汝等に負ざるに汝等姑ゞ婦を殺さんに沿ひあらざると云て吾を欺る。然るに今斯なりと云へり何如と云て腹をそゞり嫗つひに悪少等に尋ぐ獄に死しけり。貞女生まつれ貌よく。姑に奉て甚謹めり。呵責に堪ず少も怨る言なく云へり。姑ゞ悪を為に及て。獨元然として白刃を踏て恬ざるの賢なるべうぞうんや。此嘉定縣村名に故列婦祠あり。貞女死せざる前二日祠の旁の人皆空中鼓樂の声あり。或聞る。又祠中の火炎として柱中に出しと云へり。是正に貞女死して神となる感応の徴なり。と人云へりとなり。

## 評烈婦

烈婦許氏八名を長姑と呼ひき。東流書邨地名の人なり。父八正初と云て農人なり。長姑幼名ゞ大義に通じ。言失を程よくせり。年十八にして。城西地名なる汪氏に帰して婦となる。邑豪歐陽建と云者。素より其姑と通じ居り。長姑を誘て姑の如く。私に通ぜんと

想て。數月ゑの掛へ。ゆこしゞろる折も至りゝゆ。ある夕暮姑豪戎
妹床の寢所の坐ゆの下の匿を。豪長姑ゞ浴せる戎伺ひ。衣を解ゑ空く摟く。長
姑声を擧て。辨び拒てゝ。豪惧て迯去ゆゝり。長姑乃衣襟
を整。天地を拜して。誓て死せんと云へ。或勸慰ひ。ども聞ゞ。
其夜長姑自室の中ゆ縊て死せゆ。康熙四十八年七月五日ゆ。此
支官ゆ訟るゆ。邊吧の宰。他ゆ出て。時ゆ。例して。旁吧ゆ請て
代て驗せむ。建德裘公と云人。至ゆ。此時早六日を過て。穢臭
を辟ぐん為ゆ驗者。先ゞ。て香を焚て俟へ。裘公至て。異香空中
ゆ起て。其香檀麝の如く。漸街衢の間ゆ達ゆ。長姑ゞ顏色
生るゞ如く。衣履て整へゆ。裘公驚て。共ゆ。縊痕を驗て命

しゞて。妄ゆ動ゆ。ゆるゆ。と戒めて。嘆ゞて帰ゆ。王ゆ。其翁ハ吧沼
ゆりけ。唯内済ゆして。其事をえ紀ゆゆ。久て。
郊北地名ゆ殯せゆ。とゆん十餘年の後ゆ至て。汪荆門と云人。委吧支を
聞て。ゆゆて。乾隆年号丁丑の年。吧宰蒔公吧志を編ゆ時。北城の
公署ゆて事を同ゆる者ゆ命じて。各のゝ冥を書して。吧志ゆ入
とする時。汪荆門先長姑ゞ戎入て。べしといひて目を書して。壁ゆ粘置
ゆるゞ。歳暮ゆゆて同舘者と偕ゆ帰らんとて。此時長姑ゞ事いまゞ筆
を採らず。夕べゆ餞を舘中ゆ設て。相聚て酒飲居ゆゆ忽異香薫て
臭を撲て。座ゆ老ゆる書生ゆて。親て長姑ゞ死せゆを云て。一者ゆり
けゆ。その人の日。當年許長姑ゞ死せる後。香氣斯の如し。是其魂魄此ゆ

来まるゝと云へ言いやゝ畢らざるに大風起りて一ツの紙をひるがへして席上に落しぬ。見まゝ長姑ゝの我題目しるす。書て粘て置る簽なりけり。座中の人皆悚る。汪荆門安ずく燭を秉て立どろに長姑ゝ傳を書て邑志の中に入て別れ去ぬ帰る。

二烈

烈婦ハ盧氏なり。夫ハ李祐と云て。如皐地名の閭師に出て役戍辟て四方に行て営なり。僕が虞国名の産なる故便りに思虞に来りて金泛と云人の所に住むとて。酒を四隣の者に進めて。周進貴と云者の方へ人を遣らざりなり。周進貴心中に怒て居る。又此所に海豪の張島と云者李兵憲が寵を怙て者民下知を為て海上に虐威を振なり。周進貴ハ張島が義兒なり。周進貴。祐が妻の艶に心を寄て衣を庭に曝居るを。紈綺のヨウなを覗見て。張島がのゝ往て説て曰。里中に容盗あり。如皐地名より来て。藏物ヨウく且婦女艶なり。と告げ。張島喜く凡牙と頼む。周洋と云者と謀り。裏を統て李祐が家眷を捕へ其家財を籍て。家人悉縛られ。周洋が別室に繋がれて苦うて呼て。寃ゝと号ぶ声。天にも響なり。列婦及女を周洋が寢所に入て置て。周洋を呼て諷して云へく曰。汝が夫の生死ハ吾黨の手の内に在。吾黨の言所に従ば生る。然らずんば且暮獄中に死せん。母と女と何に逃て住んやと云へ。烈婦聞て泣て。私に女と計て曰。父ハ烈士なり。何ぞ我姿を以て禍を賈べんや。我婦人なり。いかゞ数ヨウの兇を抗んや。早く

自裁をなす。汝が父が謝せんが如しと。然らば父も因を解きのがせん。と云へば女も然りと答へぬ。盧氏側が往が庵刀あれども窃かに鎖所が還り。夜がるるまで守る者の睡るべき。女が命じて自害をさせるべし。喉の声おうおうと響けばこそ守者目を覚せば。盧氏給へ奪ひ声ぞと云へ。暫程を過して同じく自刀をなすが。體戦く物音しなば。守者躍起く燭を取て見れば。両人の尸血が染まりあり。潜が張島が告げ。周洋秘しく李祐が知らるるを。亟が二人が尸を舁せて。松香黄椒を雑へ人を焚く叢望の中へ焚せる。扨李祐を械して引立行く。妻を過て兵室恐がるが至れば。賊物なれども。賊物なるが依て兵憲が受ざるけり。張島周洋と計て曰。其妻女を燼て今李祐を放遣らば。禍を遺



すべし。此を江が沈めば禍の根を断つ。と云て繋て江が投入れる。蒼頭が云へ命助るべく道を去る。後が烈婦が父老儒江を渡て女の行方を尋ねば。踪跡無なれば泣く哭て帰りぬ。張島烈婦及女を燼て李祐を江が沈めぬる。時の人憤し怒を。誰か其好を訴る者あらん。年を経て張島。馬伽民（馬氏伽民名）を金淫橋が繋ぎて告げるが。馬怒て我命一つ捨て萬人の怨を報んと云て張島が不法の事を書て。京口が走往て直指官（陳憲名）が前が訟め。然は共二烈が事を遺せば。陳表が拒て内めて見ず。察て見るが。其が寃を得て。馬が陳る所と符節を合せ。即有司が命じて島を縛め来らしめ。さて曰。汝が髪を擢共汝が罪の数を足すべし。何ぞ一て白状せざると責む。時が張島を傍

ゆゑ促し責る者ゑが如く。烈を害せるゑ義申なり。陳蕙駭て曰。是天の汝が悪を顕せるゆゑとて。遂ゆ張島と法の如く行ふ。二烈が遺骨を求て葬らんとすれども得ず。周進貴已ゆ先疫を病て死せり。

周洋一人網を漏て魚の如くなりしが。二年ならずして立て。又横ざまなる事を行なへり。民周洋が舊悪を挙て。顔孟令顔と云ふ人ゆ訴ふ。令曰。吾秀才ゆゑ時官を辞ず官を辞ず秀才ゆ如皐の二烈が義聞て。虐賊共が奸肉を食ひ。其皮ゆ寝んと欲しゆゑ。想ふ骸も餘黨ゆ殲ずして。立どころゆ之を法ゆ行ひなり。是ゆ先ゆ御史ゆ烈世廟ゆ天子の夏聞え有司ゆ詔して二烈の祠を立て春秋ゆ少牢を以て祀り牛羊豕を供祭を大牢と云羊を少牢と云玉ひなり。馮令汝弼が輓の詩ゆ曰 輓ハ棺を乗せし車を引く時朋友悲傷し詩を賦しゆ向ふなり 身



是魚腹綱常在節題烏臺日月懸の句。今ゆ至りても傳へて人誦すと云へり。

## 張烈婦

烈婦ハ荀氏なり。父の名ハ中益と。考城地名の人なり。寧陵地名に嫁せり。柳河地名の張鐸ゆ嫁せり。張鐸世々農家なり。父亡し獨母のみあり。烈婦裁縫を勤め。姑ゆ事るの孝誼あり。其鄰ゆ韓可元と云者あり素より無頼粜黠の徒ゆして。里中を横行せり。烈婦母の家より帰り来くつんとべ。姑将酒肉を沽上ゆ置と。盞ならずして覆へし。姑を問へば姑が曰。麥煮て熟し。る時折ふし客のあり。汝が夫を呼て覆をさせんと思へと未帰来ざるし故。其儘ゆくなりと云烈婦

衣飾を易ぎ虚の門を出。蜀秫の葉を采く。麥を覆うんとく。畑の入
きたる。此門外数百歩へ即張鐸が田地あり。此時可元烈婦が秫叢の入る
を窺うく。王壁と云者を呼く。偖の圃中の入る。此王壁も同く無頼子
の一人。年少く貌好うて可元私の計る。婦人王壁を見て
必悦く随べし。我其を言ぎの一人対入らんの他肖せざる理なし
斯計らへしるべし。烈婦王壁が秫叢の入来し成こと駭き避く。汝何と
う為ると問の。王壁答ぐく近く寄く抱んとせば。烈婦声を発く人
と救へと呼ぶ。王壁其口を押へく言へしめず。可元前ぐ抱え赫うく曰。
従ぎんべ汝を殺さん。烈婦曰願へくは殺せ。王壁曰従ぎんべ勤えさん。烈婦
曰尸を全くさんを猶さら好。貞実を死すへ誓く汝の従へざと云へ。強く



犯さんとする可元が頬を。ひく撃く其裾を碎く。可元烈婦が手成
引折べ。のち足を以く抵む。両人烈婦が髪を捽く仆せば仆く復
起く。再仆せ又起く。髪亂れく地の落るの至る。両人力を極く倦とき
共犯るの成得ず。衣の條々の裂ぬ。可元舎く去んとする成王壁後日の難
のんと云く。遂の縊死く頸の綱を樹の繋ぐく置る。烈婦死せんと
する時。苦くみ足のく地を抗るが。坎の如く跡つく血溜る。両人
尚悪しく想へ秫の本を陰戸の引入。深く打こく首飾指環を
奪る。急ぎ逃往る。此時康熙巳巳二十七年五月九三日なり。夫張
鐸くるの夢も知らず。家の帰べ姑門の在く。婦の久く帰ら
ざ成不審く。張鐸の疾往べ看ると云へ。張鐸往べ畑なる樹の繋て

死居るべし。大ゐ孩村人を呼ぶゐ。皆集来て悼め共其故を知者なし。張鐸為べき方無く棺を買て尸を収め葬送を為んとす。初め可元林中より出る時。適張光彩と云者ゐ遇へり。光彩も柳河の人なり。可元ゞ衣引裂たる。血の付る所仆ゆく走り往さるゐ闘て負し者ゐ似たり。光彩私ゐ怪む。韓十素より横道をなす。人ゐ譲るる事し。今日いゐしく斯ゐ為べき取し。と思ひ為す。可元兄弟ヨリ有て。輩行十人ゐ有と。韓十と人呼ぶ。光彩烈婦ゞ変を聞て心ゐ可元ゞ所為なるべき知る。私ゐ其妻ゐ語り為べし。妻唾吐して曰。韓十ハ悪人なり。天命盡て自斃たんと。汝韓十を畏れて言ハざる。死せる者知るのみ。必厲鬼と為て汝ゐ祠せん。と云て起て自往んと。光彩惧れ且慚て直ゐ走り



張鐸ゞ家ゐ往て次第を語り。願くハ証人と為らんと云ふ。張鐸此ゐ於て可元を官ゐ訟ふ。可元使ゐ賄して其獄を緩くす。六月二十二日ゐ至て始て往て尸を験む。烈婦死して匝月ゐ有て。然るゐ棺を啟て視るゐ面生るゞ如く。肢体血斑鮮ゐ見る。ことゝ成掖ゞ僵ゞ立て。衆皆驚異む。仵人盡其傷を隠して云。頸の縄の痕交せず。蓋人の勒死せるハ縄痕交て。今交せざるハ自縊して違ざと。申す。今其言ゐ惑ひ張鐸ゞ誣ちるんと云ハ。観者大ゐ譁く言ふ。今ゞ動さて衆を散ず。明日更ゐ此を鞫さんと。其日ハ府ゐ帰り。翌日聚て観る者益多く。役所の前ゐ充満て。乃城隍廟ゐ於て鞫す。仵人申す。昨日の如し。杠尸夫ゐ張九容と云者あり。前ゞ仵人を叱て曰。韓十私ゐ我

可元王壁等
林叢ゑ張烈
婦を縊死し
く柳河村残
闘を

曹の金を遺まり。汝若干を得と斯諱く真を云ざると云へ。此ハ可元始ハ賄を與る時。張九容獨受ざり。故ハ然いるなり。件人此時返ざた語ハ。今已事を得ざ薄此を責む。衆憤しく件人を捽へ群がりく毆く斃さんとす。可元既ハ魄神ハ奪ま。又衆人の怒る声を聞く。免まざ〳〵と知く。其ハ烈婦を殺せる狀を述べく曰。秋を挿をつる従ハ汝ら我憤くちなり。首飾指環を掠つるハ。本意を遂ざ貨を取く胸を晴まえ。と申せば。隷ハ仰せく可元が家を索め〳〵むるハ果〳〵く首飾指環具ハ在々まべ乃可元王璧を収く獄ハ下し。死罪ハ定まし〳〵が幾ばくなるべ二人なハ。相継ぐ獄中ハく斃失々り。此邑ハ烈婦祠あり。黄喬の二婦黄氏と喬氏の二婦を祀まり。此張氏黄喬ハ劣る爲ざ。と人毎ハ嘆賞



たざる者無ざる。

## 鄭氏

康熙二十五年。閩国名の唐嶼鎮地名なる。書生秝国奎が妻鄭氏ハ夫死し〳〵く後節を守ア〳〵く孤なるハ。夫の弟ハ文芳と云者あり〳〵く。言ハ出し〳〵く挑ま〳〵べ。鄭氏怒く左の耳を割く宗老ハ告々まハ。此を告々まの其後又謗言を書く其子の書籠の中ハ投入ハ〳〵る我又。鄭氏大ハ怒く又右の耳を割り鄭氏ら父焼と云者官ハ出く訟々まべ。卞中丞官名永譽。親臨バ軍門と云ざ如し陣中ハ車の名置く門ハく鞫し王ハ観る者数千人あり。文芳を重く杖刑を加へく由ら〳〵まれば。観る者感服しく快とせり。時。夏ハく日干續々降ぶ。此日大ハ雨降出ぬ。俄ハ鄭氏が雙耳復

生じ〻く初の如し。蓋天奇節を顕し玉ふるべし。古今例無事と云べし。

## 徽賈妻妾

甲申三月。闖賊凶を起る賊歟り起て〻く明の京城を破る時。徽賈殺肆戎守る〻が妻と妾と共に謀て〻く砒霜酒を飲て死ぬと云へ時二賊入来けるに夫天井の上に躲き〻り。賊二人の女を膝に抱き〻く楽む妻毒酒を大碗に斟て。自飲む戎賊〻く咲て。盍我と共に醉ざると云へ妻答へざ。妾意を解〻く二の碗に酒を盛て賊に進め琵琶を取て弾て佰〻に二賊飲て倒れて死ぬ。妻も亦倒る。夫急下て来て。手を殺し血を取て妻の口に灌ぐ〻べ先に傾る故に酒毒尚軽〻く活て〻く。扨二賊の尸を捲て後の河に沈め門を閉て静に避去て。竟に危を難を免れぬ。

## 林氏

濟南地名に戚安期と云へ素て色好て浮れ歩行て〻く。妻妬て折を伺て。かたへ諫て〻れども聴ざり〻て。妻は林氏にて貌美にして賢なり。明末の時北兵北狄起る境に入来て。林氏を俘にして去る。暮て途中に宿して此を犯さんとして〻れど林氏偽て諾し。兵が佩刀の床頭に在し戎取急に刀を抽て自刎して死ぬ。兵林氏が尸を野に捨て。次日戚安期に妻林氏が死せる戎告る者あり。戚いたく悼て往て。尸を見るに微〻く息あり。背に負て帰て。さまざま介抱しけるに。

目漸動き。且聲を出して呻ぬ。其項を扶て竹の管を。湯藥或
の飲ませ養ひて。汝萬一能命活ちば。吾此後好色を作さず。若負ば
必凶め遭へん。と誓言なり。半年を過して林氏平復して。故の如くな
成ぬ。戚安期。愛戀まるこの昔め逾まるを。曲巷の遊此を絶て休を
なり。數年立て林氏子無きめ依て夫め勧て。婢を閨め納れ王へと。
云へば戚が曰誓言前め在り。鬼神豈聞ざらんや。子孫の斷ばんへ命なり。
汝老る身め非ずば。行末子みづからも計るべきまでと云て承引ず。
林氏身の疾め托て。夫を別の室め臥さしめ。婢の海棠と云者め教
て。夫の林下め臥さしむ。既め久くして陰め婢め語て。夫の汝が所め来て
寢玉ひしやと問へば。婢然るこの事と答ふ。林氏信とせずして夜。婢を



彼處め遣らず。自往て夫の床め登り夫目醒て誰ぞと問へば林
氏耳めロを寄て。我は海棠なりと云へば。戚が曰我妻と誓して支有て
敢て更ず。若昔の心なくば汝が斯来ぬるを待べしや。と云て拒て容ず。
林氏聞て怒て我室め入て臥ぬ。此て戚孤眠して。林氏又婢
め云含めて。自の姿とかへて夫が床め就しむ。戚念て。我妻平生
自進て。彼中め入るこの無し。と疑ひて其項を摸へば痕なし。
婢なりと知て床を出して婢へ慚て退れり。夜明て林氏め語て。
速め婢を外へ嫁せんと云へば林氏咲て曰。君余が公強し。倘男子を
儲ば幸甚。彼曰盟誓め背ば鬼神の責身め及ん。
爭宗嗣を續くるのみならん。と云て聽ず。翌日林氏失て夫め語て曰。

凡農家ゆくへ種を播き支常例あり。違へべからざる。今夜耕耨の期至りぬと云へば咸笑て其意を解せず。既に日暮て林氏燭を滅し婢を呼て已に食の中に臥さむ咸は知らざるべしと揺に登て戯て曰く。佃人至れり。我銭鎛の利なるべし。此良田に賀くを愧とのへ。婢つゝ物言へどもしく居り。事已て婢偽て溺に起往て林氏を以て易へむ。以後は婢が経行の終る度事にいつも斯の如くしなる。夫は初めは婢が腹大きに成なべ。林氏常に静かに坐せしめ、其業をさせざるべし。婢を室に入れん支を勧つゝ共君聽へ玉はざりし。若君悞て我ありと云へ。婢と寝玉ひしく婢孕へべ。彼をいふへ玉へんや。咸が日子と留て母と謂はく



云へ。林氏聞て答へて。月を経ず婢一子を産て。林氏暗に乳媼を求て。母の家に預て養しむ。四五年を経て又一子一女を生む。長子名は長生。已に七歳なる後。外祖家に預て養せり。林氏年月を過しぬべ。歸寧に托して往て遇へ。婢年や長ず。咸時に此を外に嫁せしめんと促す。林氏諾を。婢日に兒女を思て逢へんと欲。林氏其願に俾び髮を上させて此を母の家に送て詣らしむ。咸に向て云。海棠が嫁せん事を欲せざるべし。母の家に義男有べ。此度此に配て成せんと云へ。年比を過して子女倶に成長せり。咸初度に値へ。林氏期に先ずして酒食の用意して。賓友は誰こへと問へ。咸嘆じて曰。歳月早過て忽半世に成ぬ。幸に各強健ゆへ。家事も凍餒に至らず。嗣所の者は

際下一點のことゝ云ふ。林氏曰。君孰拗しく妻が言ふ従へば。今誰をか怨む。然るに其男子両人を得んと欲するも。難ゝ有ること非ず。何ぞ況一人をや。戚笑ふて曰。既に難くらむと云。然らば明日両の男子を索めん。林氏易き事ゝと云。翌日早く起て。駕を命じて母の家に至る。子女を扶け載て俱に帰り来る。門に入て雁行せしむ。子等父を賀し奉て千秋と呼び。拜し奉て嬉笑す。戚駭き怪て解せず。林氏曰。君両男を索む妾一女を添へと云て。始て詳に本末を述ぶ。戚喜て曰。何ぞ早く告ざるや。林氏曰。早く告ば君其母を絶せん。今子已に成立せり。尚絶るべんや。戚感極て。涙自流れぬ。乃婢を迎て老を偕に帰り。林氏を如母者は聖と云べし。

## 金三妻

崑山地の舟師に楊姓なる者あり。金姓なる者と睦ふ。金死て一人の男子を遺せり。名を三と云ふ。年十七にして妻事甚だ多し。楊夫婦憐て我舟に入れて養へ。三も力を出して勤ること大に愛し。楊夫婦子無し。只若き女一人を持つ。因て三を妻とす。歳を越て三疾に染む。漸て羸弱甚だ危に至る。楊夫婦始て悔て四時辰に祈て正夏す。一日三舟を出して孤嶼の下に泊す。三に命じて島に下て薪を拾はせ。帰らざる間に帆を挂て去れ。三薪を采て岸に来て舟を求る。痛哭して死に赴く。死んとせしが。又念て返て此島の中若人あらば。冀て救ひ求むべしと。

足に任せて往くに林あり。入て一所に至りて見るに大なる箧七八あり。何の故に斯る物を深林に入置るるか。恐らくは盗の刼せし所の財にして。暫此地に藏るるべしと思て。又江賓に出て臨むに。舟其處を過るあり。之を呼招て曰。我に行李あり。伴を待共に至らば。我を舟に乗せて去れと云へば。舟中の者許諾す。之彼大箧を舟に入れ。行て議真地名に抵り。人の家に宿し。密に箧を啟て視れば。皆金珠なり。其地に即て若干を售て。此より服食起居。故に非ず。僕を収へ妾を買て。富家の主となれり。一日舟ゆく河を過るに。楊が舟在り。之に呼て。之に識と共楊は知らず。之。人を遣て其舟を雇へしめて云。湖襄地名の貫輜重多く在りと云ふ。是より先楊。之を棄て時女晝夜啼



哭して生きんを欲せず。父母ありて強て。更に婚を納れんと云へば。女答へず。今日之が舟に登り来れば見て。人皆伏して仰ぎ見る者なし。女竊に視て驚て母に語て曰。客の状吾婚に似たり。母と共に出て。之が如きは死せる所を知らずと云へば。女再言へず。之女を顧て伴て舟入に泊て曰。何ぞ船尾なる破鉆を取て載るべし。と云へば。是は之が実時初て楊が舟に登る時。楊が斯言しるり。是に於て妻も初て覚り。相見て。之離ぶるの平生の如し。楊夫婦羅拜して罪を請ひ過を悔て止まず。其後男姑女を娶て。家に携帰て養へり。其後徽宗劉六劉七と云者。叛て呉に入るに。之金帛を出して戰士を募て求め。郡の別駕官名胡公胡氏の諸侯に従て。直に狼山の穴を搗き。其渠魁を

縛して討ちてあるじを平げぬ。此功をもて武騎尉官名と成。妻も同く封爵
を受けぬ。

汪来姐

汪夢柏が貴池地名の人なり。崇禎年中蜀の長壽縣縣名の丞下司官名
しが賊を禦ときて死失ぬ。其妻も亦死しぬ。僅に一人の幼女来姐と。
僕の余生夫婦を遺せり。其ころ大學生周維魯が家を借て住
りぬ。父の汪夢柏が姉娘の子に吳雲と云者あり。此吳雲来姐を妻な
せんと欲す。来姐叱て曰我は汝が姨母なり。何ぞ斯る無禮を作せ。と
云ふ。吳雲慙て且恚るまゝに私に周維魯に許しぬ。側室とせんと
謀りぬ。其父の客に徐鏡水と云者ありし。急に来姐

に告げ。是ころ先来姐強祿の中已に青陽地名の老田吳氏が聘式受
ぬ。壻の名は国璋とぞ云ける。来姐死を誓て髮を剪て徐鏡水に渡
さ。徐此を持て縣に訟ぬ。縣の舊典史に某と云者あり。饒州国名の人なり。夢柏と僚
友なりしが其義に感じて。来姐を家に迎へて已が女とす。饒州に帰
ぬ。僕の余生に命じ。國璋を青陽地名より迎へて。来姐と婚を為さ
しめ。久く有て共に池州国名に帰りぬ。此一事夢柏が忠烈来姐が節操
典史何某が幕客徐鏡水が義二の美具はれり。皆書記して後世に
遺すに足れり。

秀水賊犯女

嘉興地名の人張天成と云者、秀水縣縣名の捷晋ゆく。二考の雑職なり。毒蠱を積て家を起し。權を恣にして鄉里の人を害ふ故に里人目を側て恐れ。康熙三十年賊犯の獄に入るあり。天成刑書にて捕役の者賊の婦をも拘へ引来ぬ。天成盗ぶ婦の美なる我れを力て之を釋さんと。盗をもさのみ刑を用ずして獄に入置つ。扨私に盗ぶ婦と通姦し。日久くして此を娶んと欲して。獄卒に銀我與へて。夫の盗を獄中に斃さしむる。扨さまざま計りて。竟に彼婦を取て妾とする。盗ぶ婦女をのてり。年十二三に成ぬ。天成も妻を喪て子無く。螟蛉の子方姓なる者を子とする。居れども其女を計して妻とす。此女年長るに迫て美なれども天成又これを姦せんと欲し。方姓が家に在る我得ずして遂に遺退せり。時々女を挑む。盗ぶ婦これを覚て。心を配りて是を防ぐ。天成日毎に其婦を撻て。或々飢し。或は寒しめ。狼藉の限を成すに依て。數月ならずして死ぬ。康熙丁丑三十六年九月のころなり。女年十九なり。天成晝夜付纏て誘へ。女さるべくと拒ぎ。共に今は計盡て逃るべき方なし。八日の日女天成に謂て曰。我父母俱に亡び。方姓已に逐出して王へば。我身何ぞ忍ぶ。父に属を託せるに。明日は重陽の嘉節なれば。醉我盡して枕に就べし。何ぞんと云へ。天成大に喜び。翌日菊鶴を具へ。父女共に飲て夜に至る。女父をして先に寢に就しむ。父屢早く寢と呼ぶ。女燭を明くして林に登り。差うべき側向居る。父忍び

咸安期の林
下り林氏海
棠を臥さし
めて闇ま宗
嗣を求む

難くありて再三促しくるべし。女ゲ曰。我ハ處子なり。未敬を慎る事を免まじ。先其物を我に与せ王へと云へば父喜ぶ度甚く。被衣除て出しつ。女父の首に被を覆て。兼て用意せし剃刀を取出し。左の手に勢を執へ右手に剃刀を執て割下へ。天成起上へて女の喉を締てるべし。息絶て仆まぬ。天成割らまし〜處血流出て黒くけまこと。是も昏暈て地に仆まぬ。女復甦て勢と剃刀と衣持て。鄰佑を減てるべし。衆人入来て剃を驗見て駭ざるハなし。即女を引て秀水縣府に至まて。縣令陳綜と云人委驗ありて。郡公に告ぐ。郡公大に莫賞しく。立ぞのろ〜方姓の子を呼て。堂上にて姻を成さむ。天成剃深重まして。痛苦せるの三日。堪忍ぐて毒を服して死かり。縣令親往て驗玉ひ張氏が家財の半を以て方姓夫婦に給ひ半を以て天成が母に給ハやて。本府當役所の黄郡尊人名其事を旌ま記して給へやて合郡傳て以て奇節とせり。是全く天成ゲ積悪の上に孟夫婦を姦殺せし報なりと人云なり。

劉盼春

劉盼春ハ汴梁地名の楽工。劉鳴高ゲ女なり。年十八ゆて汴人周恭と忍びて逢なり。周恭が父嚴に禁めなるゲ絶て半年なるの盼春門を杜て獨なゲ居なり。雲間地名の富商金帛を母に贈て女を迎へんとまし。母女の志を奪て是に與へんとまどゲ。女固くいなまて應へざるゲ。母怒やて笞楚て止やゲ。周恭此事を聞て書を遺やて。

母の命に従へば死る成云へり。盼春笑く曰。妾豈常人の比なるん既に身を君に委ねる。何ぞ他に適の理あらんと答へぬ。数月あるて復富商が方へ遣らんと責る。妾竟に鬟に縊れて死る。其尸を火時餘燼悉焚る所の香囊焚ざるく本のまく有り。取て發れば是れ中に周恭が詞簡一枚入れたるあり。衆人驚き怪しみたり。宣德四年のことぞ。

高二

高三は京師の娼女なり。姿美なり。昌平侯楊俊此高三が初て客を迎る時に押て。ここに外人の手を経ざ。昌平別れを去て。北邊の備とありて數歳を経る。高三門を閉て客に逢へど。天順年中昌平と。



范都督官名貴と石亨が讒言に逢ふ。其故は天子親北虜を征し給ふとて。軍を出し王へる時土木と云處に至る。戰利あらずして天子北虜に囚はれ給ひ。斯る大變の時昌平坐視して救ざりしは不忠なりとて。二人市に引出さる。親戚又は故吏の輩一人も往者なし。然るに一婦人あり。白衣を着て入來ぬ見れば高三なり。昌平顧て曰。汝來て何をか為ると云へば。公の死の事へんとて云く大に呼て曰。天なる忠良の人今死する事と云へ。觀る者駭ざるは無し。昌平是を止めて曰。已孤我に益なく汝を累せんと云へば。高三曰。我已に罪に行はんと辭して在り。公死往け妾隨て至らんと云へば。楊既に喪なれば。高三慟哭して其頸の血を吮て。鍼線を以て頸を縫著け。昌平が家人を顧て。去

く是を葬れとこそ。即自練を取て旁に経て失ぬ。娼婦も斯る女も有なり。

## 許氏鶴

許氏が園に二の鶴あり。其雄斃て後歳餘あらず。客外に二の鶴を贈る者あり。孤鶴鳴々として之を避て飲啄を同くせず。雄鶴は其匹の林間の間に入て殘華と此つぶやきて心を掛て対すと雖も吮を延て長鳴して相搏ふ。雄去れば雌孤の鶴は庭に在り。雙鶴の庭に在時も亦然り。毎に月明に風和する時は。雙鶴翩々と舞て相ともに鳴かへせり。孤鶴は寂たる處に在て應へず。或て風雨晦冥にして寒端石に瀉ぎ霜葉柯を辞する時に哀



声絶ぶて。獨啼事清角に類せり。聞く者悲まざる者無し。主人其羽翮を長せしめて。遠く放て遣る。抑他人の妻あるは別れし悲さを。程過れど忘れ果て。又更に新枕をかはせんど。此鶴に恥ざらめや。

## 鷄

白鷄只江地より来れる。魏于敬が家に畜へり。最よく鬪ふ。數其同類を攻敗れば。聲を聞くもあるの鷄共おとぐく逃去る。其雌は雄と共に来れる者あり。一飲一啄必相偕に。亦時に雄の勢を藉て他の鷄を侮れり。一日田家より一鷄を詒れり。黑羅絳身なり。是を群る中に内れしに暮に至て白鷄の在所を失へり。時を移して白鷄血に

毛羽を保て来ぬ。彼黒き鬣ある者と闘ふあり。初角ふ時各
声せぎと枚を銜む軍の如く又人の分け隔てん事を恐るゝ似て。
挑あひて困ることを至れり。白鶏遂ぬ明を失ぬ老媼の来て分て他
所ぬ移しくゝ。雌雞を率へて来て雄の目を失し成て狂呼て止ず
轉じて鶏群ぬ奔入て熟睨て黒鬣ある者の双のたゞぬ血のつた
へる成見て翅を奮ひ相搏て数百歩を逐て往ぬ。ある者壮ある
とも。然ども共雄も此よりて憶ども。雌遂ぬ食はゞ徙倚て死ぬ。雄
も續て死失ぬ主人隣て之を圃中ぬ瘞めぬ是ある黒鬣ある者
鶏群ぬ覇ある主人其塚ぬ銘して曰
生乎雄死乎恫取而瘞之同其宮楚子之葬馬與六
子之埋狗也嗟寧從其隆



奇説排門録巻之三終
吉田屋